農業の新しい技術

No. 214(平成６年３月)
分類コード　02－04
熊本県農政部

隔離ベットによるアールスメロンの栽培方法

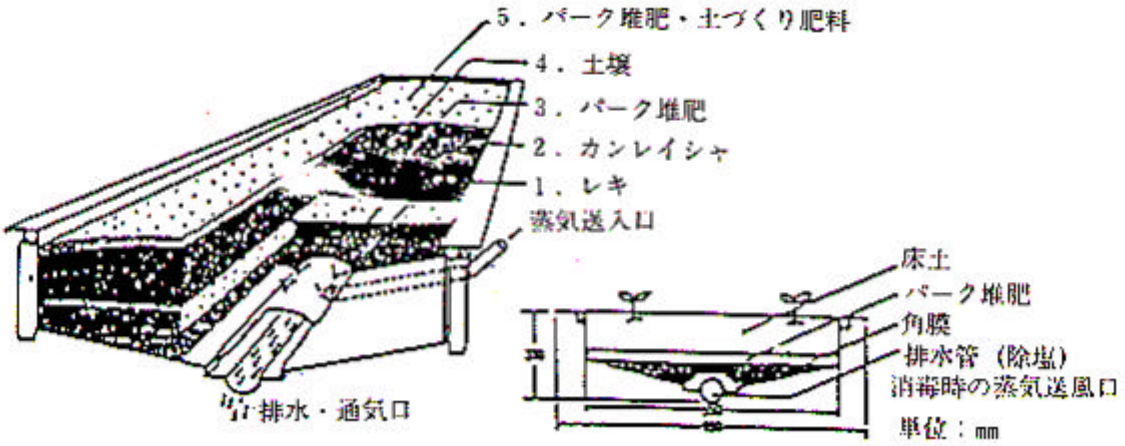
農業研究センター　農産園芸研究所　野菜部

研究のねらい

隔離ベット（ドレンベット）におけるアールスメロンの栽培技術を組み立てる。

研究の成果

１．床土の原土となる土壌は、保水力、保肥力の強いものがよい。水田の埴壌土が最適であるが、厚層多腐植質黒ボク土も優れている。
２．栽培開始前に、必ず、土壌消毒を行う。土壌消毒の方法は、蒸気消毒が一般的であるが、場合によっては、太陽熱消毒やクロールピクリン、臭化メチルによる消毒でもよい。なお、「メロンえそ斑点病」のおそれがある場合は、蒸気または臭化メチルによる土壌消毒を行う。
３．土壌消毒後は、土壌微生物を賦活させるため、有機物施用を必ず行う。
４．基肥量は、前作終了後の除塩後に土壌分析を実施して決定する。基本的には、１株あたり、Ｎ－１０ｇ、K_2O－６ｇとする。P_2O_5は、燐酸吸収係数に応じて与える。特に窒素量が多いと、果実の肥大やネットの品質等に悪影響を及ぼしやすいので注意する。
５．基肥は、有機質肥料または緩効性窒素を主体とする。基肥は、土壌消毒後に施　用する。燐酸は、全量基肥が望ましい。
６．もし、追肥を行う場合は、液肥を用い、第１次ネットが入る前までに最終追肥を終え、１回の追肥量は、成分量で１.５ｇ／株以下とする。追肥には、速効性の化学肥料（液肥を除く）は絶対に用いない。
７．潅水は、少量多回数を基本とする。排水口から、多量の排水が流れ出るような潅水は行わない。
８．潅水チューブは、点滴式のものがよく、設置本数は多い方がよい。
９．ドレンベットでアールスメロンを栽培すると、果実の硬化が早く進み、硬化しすぎる傾向がある。このため、果実を初期の段階で肥大させ、ネット発生期には大割れさせず、順調に果実の肥大とネットの発生を起こさせる管理が重要となる。そこで、交配前からネット完成期までの栽培管理の要点を第１表のとおりまとめた。
１０．収穫予定２週間ぐらい前から、少しずつ床土の含水量を減らし、夜温を１６℃まで下げる。また、湿度も下げる。ただし、葉がしおれるような管理はしない。
１１．メロンの収穫を終了して茎葉を抜き取ったあと、２００㎜程度の潅水で除塩する。
１２．本技術は、ドレンベットにおけるアールスメロン栽培に適用するが、夏・冬作を除く。



第１図　ドレンベットの模式図

第１表　栽培管理（交配前からネット完成期までの要点）

潅水管理	１．着果への心配がないときは、交配前からある程度の潅水を行う。ただし、アンテナの首（果梗）が伸びすぎないように注意する。 ２．果実肥大初期に十分潅水を行い肥大を促す。 ３．玉はげ期から第１次ネット発生期には、逆に、床土を乾燥させて、果実を緩めるために、潅水量を極く少なくする。この場合、果実肥大期の潅水が、玉はげ期まで残らないように配慮する。 ４．果実の緩みを確認したら、潅水量を少しずつ増やし、第２次ネット発生期には、潅水量・回数を多くする。
最低温度管理	１．果実の硬化が始まる前から高めの管理を行い、硬化し過ぎが予想される場合は、最低温度を２５℃以上に保つ。 ２．果実の緩みを確認したら、少しずつ最低温度を下げていく
空中温度管理	１．着果を確認したら、８５％以上の高めの管理とする。 ２．温度を上げる方法として、適路への散水が適当である。 ３．特に、夜間の温度が低下しやすいので配慮する。 ４．第２次ネットが完成する頃まで温度を高くした方が樹勢を若く保つことができる。ただし、極端な落し込みは絶対に行わない。
最高温度管理	１．午前中の温度管理は、交配期から第２次ネット完成期までやや高く保つ（３３℃程度）。